

月刊田中けんの感想をお送りください。匿名にてご紹介します。紙面の都合上、編集しますので、原文とは異なる場合があります。ご了解の上、e-mail・郵便によるご連絡をお待ちしております。

**弁護士の無料法律相談を受付中
議員インターンシップを受付中**

詳しくは、03-5662-7755までお電話を。

田中けんの
活動

インド洋津波被災地の視察報告

1ヶ月後の被災地を訪ねる

2004年は世界的に震災が多い年でした。年末の12月26日にはスマトラ沖地震およびインド洋津波が発生して、周辺諸国に多大なる被害を与えました。

田中けんは1月24日にプーケットに入り情報を収集して、26日、27日とカオラックの被害状況を視察しました。カオラックを視察先として選んだ理由は、タイ国内の中で、一番大きな被害を受けた場所だと言われていたからです。

震災発生後、刻々と伝わってくる情報の中には、1ヶ月たったその時でも、未だ死体が転がっているとか、疫病が心配だとか、震災に便乗した窃盗や強姦などの犯罪が多発しているなど噂がありました。

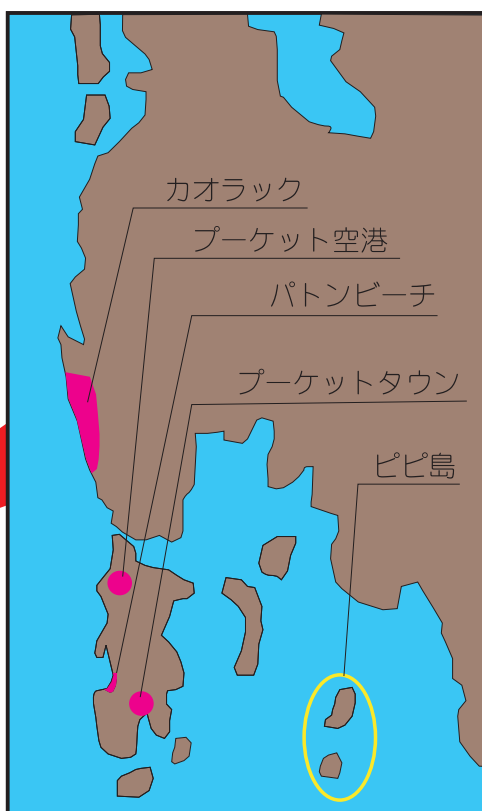
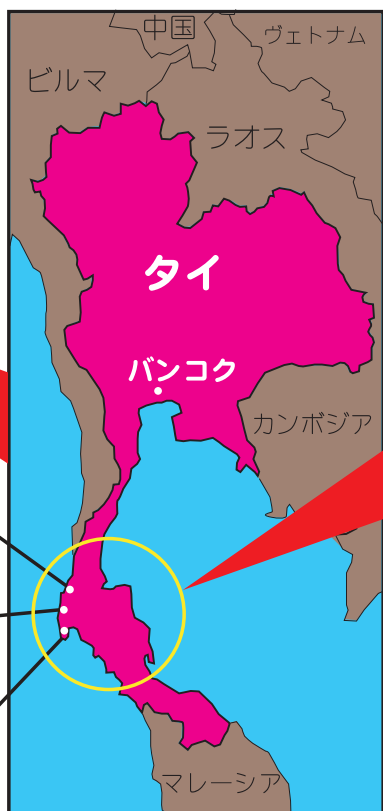
噂の真偽は自分が現地まで行って確かめるしかありません。ただ、自分自身が二次災害の被災者にならない注意が必要です。そこでまず考えたのは、安心して泊まるホテルの確保です。

26日の朝、プーケットのパトンビーチからタクシーに乗りました。カオラックまでは2時間以上の移動です。運賃は言い値で1,700バーツ(約5,100円)でした。しかし、事前に泊まれるとの情報を得ていたホテル(1泊1,000バーツ)は既に満室でした。被災直後で客など少ないとの思いこみから、予約を入れなかった失敗でした。

タクシーは既に帰してしまったので、仕方なくホテルを出て歩いていると、道端に小さな旅行業者を見つけました。話しかけてみると「もし良ければ、ここに泊まる？」という感覚で、簡易宿泊施設を紹介されました。1泊400バーツ(約1,200円)と格安です。本日の宿泊先をここに決め、早速その場でタクシーを貸し切り、その日の午後から視察を始めました。以後、写真と共に現地の様子を報告します。



支援物資が集められたテント前



カオラックとは、タイ南部の西海岸に位置する新しいリゾートです。既に多くのヨーロッパ人はここを訪れていました。プーケット島(その実態は一つの島で面積は約530km²。東京23区の1.6倍もあります)北部にある空港から車で約1時間北上した場所にカオラックはあります。

ちなみに被災したリゾートが特にヨーロッパで注目されたのは、そこで休日を楽しんでいた多くの自国民が被災していたからです。カオラックにはなじみが薄い日本人の場合、ピピ島のように他のリゾートで死者がでました。



丁度その頃は、タイの総選挙でした。路上には大きなポスターがありました。数字で投票すると思われること、公共物である電柱に貼り付けることが認められていることなど、日本の選挙スタイルとは随分と違っているようです。今回の取材とは直接関係ありませんが。



パトンビーチ。ちらほらと観光客の姿が戻ってきました。



津波によって壊されたATM(自動現金受取機械)



壊されたマクドナルド



カオラックのビーチ。プーケットと比べると、まだビーチには観光客は戻っていない。



津波によって壊された車



津波によって壊された建物



カオラックの被災地にて



津波ボランティアセンターの看板



港から4kmも流されたという警察の船



津波によって壊されたカオラックのリゾート地帯



津波によって壊された建物



完全に破壊されたリゾートホテルの入口にて



津波によって壊されたカオラックのリゾート地帯



タイの軍隊キャンプ場まゝにて



今回の津波で、タイ国王のプリンスが亡くなったとのことで行われている葬儀



支援センターのテントの前で



支援物資

事前には、プーケットが全滅などという話も聞きました。しかし、現地に行ってみると、被害は西海岸の一部だけです。決して「全滅」などではありませんでした。東京23区の1.6倍もあるプーケット島の東海岸などは、全くの無傷です。西海岸にしても、一本内陸に入った海沿いの道になると、もう被害はありません。

プーケットの被害状況はその程度でしたが、カオラック

は違います。海岸線から、3～5kmの内陸までの間は、「全滅」という言葉が相応しいぐらい何もかも壊されていました。死体を目にすることはありませんでしたが、多くの方々がここでお亡くなりになったことを想像できました。それでも、ここに暮らし、ここに住んでいる色々な人たちがいる。これは現地に行ったからこそわかる生身の情報でした。感想も含めて、エッセイに私の視点が続いてゆきます。

被災地をめぐる面白い議論

震災を前にして「面白いとは何事だ」と、怒らないで欲しい。今回の問題提起は、被災地や被災者そのものではない。被災地や被災者に対して「どうするのか」という私たちに向けられた問題なのだから。

2004年12月26日に発生したインド洋津波によって、世界の多くの人が亡くなった。死者20万人とも言われるこの大震災を前にして、ふざけた態度は許されない。死者と死者の親族のことを真剣に考えるからこそ産まれてしまう意見とは、自然に神聖なる「絶対的修飾」がされてしまう。ここに被災地にいる当事者の絶対と被災地にはいない世論の絶対が激しくぶつかる。

その前に、現地の情報を発信する側に立って、情報の質を考えてみよう。まずマスコミ報道は、どうしても事件を針小棒大に伝えてしまう。小さな事件は大きく、大きな事件はより大きく伝えることによって、情報の受け手を驚かそうとする。人々の関心を強く引こうとする取り上げ方は、マスコミの宿命と言っても良い。それに対して、当事者である現地の個人がインターネットなどを通じて発信した情報は、随分と落ち着いている。等身大の情報とも言えるが、そこで普通に働く人たちにとっては、大げさな表現は、自分たちの生活にマイナスとなる。特に観光に関わっている人たちにとっては、被害が大きいと伝えることで、町に観光客が来なくなることを恐れる。恐れるからこそ、平静であると伝えてしまう傾向がある。ここに報道する側のよって立つ価値観の違いからくる情報の差異が産まれてしまう。

現地を知らない私たちにとっては、たとえそれが報道する側の価値観が反映した情報だとしても、それ無くして現地の様子を知ることとはできない。どちらか一方が正しくて、どちらか一方が間違っていると決めつけるよりも先に、たとえ矛盾する情報だとしても、どれもが現地からの貴重な情報に違いないのだ。それなのに、その場にいない情報の受け手には、マスコミ報道を盲信するが故に、個人から発せられる情報を素直に受け取らない場合がある。情報に隠された背景を想像し、隠したがつている「裏の情報」を勝手に読みとり、激しく噛みつく。更に勢いづいて否定を重ねる。

「多くの人が死んでいるのに、そのことが全く報道されていない」
「被災地でノーテンキに暮らしている奴らがいる」
「金もうけしようとしている」

情報の受け取り側は、地元情報を発信した個人の職業的背景を広い意味での観光業と推定し、観光業であるが故に、被害を小さく伝えようとする意図を、その情報から故意に読みとろうとする。被害を小さく報道しようとするこの姿勢を部外者は、死者の絶対性を前にして批判する。

「身内の誰かが亡くなったら、普通は49日までは喪に伏すのではないか」
「魚や蟹はたくさんの水死体を食べているから、もう現地ではシーフードは食べられない」
「遺族を思うと、浮かれた気分での観光は自粛した方がいい」

多くの人たちが死んだ。家を失った。誰もが悲しみのどん底にいるというのに、そこで働いて金もうけをしようとする当事者たちを部外者は想像における「悲しみの絶対性」から批判する。

なぜこのような批判が、被災地の当事者に向けられてしまうのだろうか。そこには、部外者による「理想的な被災者」像が見て取ることができる。「理想的な被災者」とは、マスコミ報道が好んで報道してきた人たちのことだ。家族を失い、家を失い、嘆き悲しみ、何も手が着かない状態の被災者のことを、そのまま現地の被災者全員として考えてはいないだろうか。これに当てはまらない自立しようとする被災者を許せない気持ちとは何だろうか。

もちろんマスコミが好んで伝える典型的かつ「理想的な被災

者」は確実に存在する。マスコミは苦しみ悲しんでいる人ほど取材対象として取り上げ、多くの時間を割き報道する。

しかし、被災地には色々な人たちがいる。どんなに多くの人死んだ場所でも、生き残った人がある。生き残った人の中にも、被災の程度が重い人もいれば、軽い人もいる。当たり前のことなのに、その当たり前のことが、情報の受け手に伝わっていない。実は被災の度合いが軽いからこそ、自立もできるし、自分たちで現地の情報を発信もできるのだが、その姿がマスコミからは伝わらない。

私たちの日常生活でも、基礎的活動の最初に「働く」ことがあるように、軽度な被災者にとっても、きっと働くことが1番目の基礎的活動になるだろう。それが部外者にとっては面白く見えないのだ。被災者らしくない。理想的ではない。それはまるで、「おまえは被災者なのだから、被災者らしくおとなしくしている」と言わんばかりの「思いやり」である。「家族が見つからないとか、援助物資が足りないなど、現地での不平不満をもっと述べよ」と言うことなのだろう。

復興のためのボランティアではなく、被災者が自立のために働くことは「思いやりの悲しみ」に包まれた部外者にとって、単なる「金もうけ」として見えるらしく、とかく批判の対象となる。今回、津波の映像がビデオCDとして現地で販売された。津波という元凶を金もうけの道具に使ってと、批判する人がマスコミに登場した。「別に構わない」と言う人も登場した。ただし、一番多く報道して、一番金もうけをした、現地人でさえもないマスコミ自身が批判されることはなかった。

新潟の震災によって「新潟は危ない」というイメージができてしまった。それにより新潟の観光業がダメージを受けたという。被害を全く受けていない観光地であっても、場所が新潟だからと言う理由で観光客が減ったらしい。震災直後、旅館の女将さんたちが「もっと新潟に遊びに来て欲しい」と東京まで訴えに来たという。「悲しみにつつまれた現地」とは、部外者が作り出した物事の一面でしかない。力ある当事者は悲しんでくれることを期待はしていない。むしろここに来て、遊び楽しんでくれることを期待している。何という皮肉なことか。

どのような被災地であっても、被害を受けた人たちこそが、もっと現地に遊びに来て欲しいと言う。被災していない人たちは、このような痛ましい状況を見ているのに、とても現地で遊べる気持ちにはならないと言う。(そう言っている人たちでさえ決して遊びをやめるわけではない。行き先を被災地とは全然関係がない場所へ変更して、しっかり遊ぶことには違いないのだ)

真に悲しんでいる人たちは、喜ばそうとしている。
真に楽しもうとしている人たちは、悲しもうとしている。

このような当事者と部外者の意識の違いを目にしたとき、私は小人プロレスをめぐる議論を思い出していた。小人プロレスとは、大人になっても、身長が130cm前後にしか伸びないなどの成長障害者たちによって行われるプロレスである。かつては女子プロレスの前座として行われたときがあった。彼らのプレーはとてもコミカルで観客を大いに笑わせたりもしたが、今ではもう無くなってしまった。無くなってしまった原因として「障害者を見せ物にしたり、笑い者にしたりすることは良くない」とか「障害者を笑い者にすることはかわいそうだ」という「良識ある世論」が影響したことは間違いない。それに対して、このような一見まともな意見とは、実は単に健常者が「醜い者は見たくない」という高慢なエゴから発せられた意見に過ぎないという評論家がいる。醜い者に対する健常者の優越感と負い目が、小人プロレスを社会的抹殺へと追い込んだというのだという。小人症という就職などで何かと差別されがちな障害者たちの貴重な職場が、こうして社会から奪われていったのだという。

「福祉を受けるべき障害者とは、おとなしく福祉を受けていれば良い。間違っても自分たちの不具や不幸をネタにして金もうけをする、つまり自立しようとしてはならない」

健常者による善意の強制的発想が、「笑いものにすることは良くない」などの一見まともな意見の裏にはあるのだ。

「支援を受けるべき被災者とは、おとなしく支援を受けていれば良い。間違っても自分たちは大丈夫であるという振りをして金もうけをする、つまり自立しようとしてはならない」

福祉を支援に、障害者を被災者に読み替えたとしても、健常者や部外者の基本的な発想は、何ら変わってはいないではないか。

かつて存在した小人プロレスに携わっていた人たちは、きっと自分たちのプレーを見てもらい、観客が大いに笑い大いに楽しんで欲しいと願っていただろう。今、被災により苦しんでいる観光地の人たちは、それでも現地に遊びに来てもらい、大いに笑い大いに楽しんで欲しいと願っているだろう。それなのに善意の部外者は、「真に楽しめないから」という本音はひた隠し、不謹慎だと言って、被災した現地で遊ぼうとする者、客を呼び込もうとする者を批判する。

以下、プーケットで観光業に携わる女性が書いた文章をインターネットで発見した。全文を引用するので、何かを感じて欲しい。

2005年1月の日記 1月25日 不謹慎？

プーケットの復興の様子をレポートしたり、プーケットにきてくださいとアピールしたりすると、それに対して、必ず「不謹慎だ」という人がある。

人がたくさん亡くなった場所に、旅行に楽しく行くことは不謹慎になるという。プーケットに行くこと事態が、非難ごうごうで行きたくてもいけない人もいるという。

人が亡くなったことや、津波によって大打撃を受けたのは観光客だけでなく、島民全員が同じだと思う。死んだ人だけを悼むのではなく、生きて生活をしないでいけない人たちのことも考えて欲しい。観光の島に観光客がいなくなっ

たら、それは、どう考えても、二次災害以外の何者でもない。

遊びに行く人がいたり、自粛したりする人がいたり、それは個人の自由だと思うし、人を咎める権利なんてない。ハッキリ言えるのは、島民は観光客に旅行を自粛して欲しいなんて、誰も思っていないし、そういうことを言われたら、生きていけない人が出てきてしまう。人を哀れんでいる言葉が、逆に誰かを自殺に追いやる発言と、表皮一体になっているということ。こればかりは、ここに住んでいないと見えないことだと思います。

商売のことを別にしても、今のプーケットは、観光に来てても充分に楽しむことができるし、ここで何か不便があるのではと躊躇している方があれば、私は「大丈夫ですよ!」と、自信を持って言うことができます。この年明け、旅行に来た方から、いろんな感想がBBSに書き込まれていますが、日本で思っているのと、現地では全く違うという言葉が一番多かった。そして、不便だった。楽しめなかった等の苦情などは、ほとんどありませんでした。

本当の姿は、TVを見てるだけでは、わからないと思います。「不謹慎」の一言で片付けられるには、あまりにも苦しくて重たいものをみんなが背負っていることを、感じずにはいられない。来て、実際見て、それでもその人は、「不謹慎」って言えるのか？必死な復興の様子を見て、実際はもう何もないけれど、それでも頑張ろうと希望を持っている人を見ても、そう思うのか・・・？

逆に「今だから、あえてプーケットに行く!」と欲してくださる方には、本当にありがとうございます。

(<http://www.phuketwebmagazine.com/nikki1.htm>より引用)

このような被災した地元からの訴えに、行くのか、行かないのか、その判断は客となるかもしれない私たちに任されている。被災地をめぐる面白い議論とは、傲慢さと隣り合わせの勝手な「思いやり」によって素直に楽しめなくなった私たちの問題なのだ。

江戸川倶楽部主催 イベントのご案内

江戸川倶楽部 ☎ 03-5662-7755 E-mail: club@t-ken.jp まで

お花見

3月27日(日) 18:00～

行船公園 源心庵 参加費 2,000円

江戸川区北葛西3-2-1 ☎ 03-3687-3492

アルコールやお菓子などの持ち込み、差し入れを歓迎します

桜の開花は、その年の天候によって左右されます。早くから会場を予約する関係上、仮に当日の開花状況が不良であってもご了承ください



対話集会

4月17日(日) 14:00～16:00

参加費 無料

篠崎コミュニティホール 第3集会室 江戸川区篠崎町7-27-1 電話 03-3698-8861



読者からの便り

朝駅前でお見受けしたり月刊紙を読んでいます。頑張ってくださいとかお願いしますとか声をかけて応援したいのに、恥ずかしくて目をそらせて通り過ぎてしまったりばかりですが。。。

あ、余計なこととは思いますが、そろそろ最近のお写真に変えたほうが良いのでは？

若くハンサムだった写真より、少し太られて年を重ねられた今のお顔の写真を使われたほうが、見た感じは貫禄があり、安心感、信頼性、頼りがいが高い印象を与えるのではないのでしょうか。もちろん今でも十分ハンサムだと思います。でも、若僧(ごもん)なさい)という印象はなにかと不利だと。少しは、おじさん!となられた方が!?

イベント報告

対話集会

2月5日
小松川さくらホール
参加者 3名

高速道路を無料にしよう! 禁煙を徹底しよう! 都市人口を減らそう!



江戸川区
区議会議員

田中けん

自宅事務所

〒132-0021 江戸川区中央4-25-14

電話 03-5662-7755

E-mail info@t-ken.jp

プロフィール

1966年 江戸川生まれ/松江三中卒 墨田川高校卒 千葉大教育学部卒

1995年4月 江戸川区議会議員選挙当選(2,789票・41位)

1999年4月 江戸川区議会議員選挙当選(4,282票・16位)

2001年6月 東京都議会議員選挙落選(12,394票・8位)

2003年4月 江戸川区議会議員選挙当選(4,103票・15位)

ホームヘルパー、タイ式マッサージ上級課程修了、江戸川トライアスロン連合会長

ホームページからは、田中けんがテレビ出演したときの映像を、動画にてご覧いただけます。 www.t-ken.jp